

自然発生的なスポーツ組織の経営

Management of Unintentionally-made Sport Organizations

1K06B025

指導教員 主査 木村和彦先生

石山洋平

副査 作野誠一先生

【諸言】

もし現在、成人であるあなたがスポーツをしようとした場合、どのような条件が必要になるであろうか。「いつ」「どこで」「誰と」「どんなスポーツ」をするかをまず考えるのではないであろうか。小学生の頃などは、遊ぶ約束などしていなくても、学校の校庭に出れば学年が違う人たちでもスポーツを楽しんでいた。しかし、成人となった現在では、決まった仲間達と約束をしてスポーツをすることが主流となっている。もし見知らぬ人が、スポーツを行っている最中に入り込んでくれば、スポーツを行っていたメンバーは入り込む人を不審に思うに違いない。一方で、皇居周辺でランニングをする集団が存在している。この集団は性別も年齢も国籍さえも隔たりがなく、参加者の出入りが自由で、それぞれに何か目的を持ってランニングをしているようだ。このような組織は、「自然発生的な組織」だと思われる。このような「自然発生的な組織」が、スポーツ参加人口を増加させいと考ええる。このような組織がどのように生まれ、どのように継続していくかを知ることができれば、「自然発生的な組織」はさらに増加するのではないかと考える。

そこで以下の二点を目的とし、研究を行った。

- ・自然発生的な組織は、どのように発生し、継続されていくかを検証する。
- ・検証を行うことにより、自然発生的組織の今後の可能性を提言する。

【研究方法】

代々木公園での大縄跳び集団及び皇居周辺のランナーにインタビュー調査を行った。また、筆者自身が活動に参加をする参与観察を行った。代々木公園・皇居周辺どちらも各四回の参与観察を行った。

【結果と考察】

各回の参与観察及びインタビュー調査結果から以下のことが明らかになった。これにより、自然発生的なスポーツ組織を即知集団エンカウンター・グループと未知集団エンカウンター・グループの二つの集団に分けてモデルケースとして構造化した。

- ・自然発生的なスポーツ組織の発生について

(1) 即知集団エンカウンター・グループの発生には、組織の「ビジョン確定」が発生の要因となった。

(2) 未知集団エンカウンター・グループの発生には、「実践者がいること」が発生の要因となった。

- ・自然発生的なスポーツ組織の継続について

(1) 自然発生的なスポーツ組織内で、スポーツを実践している人がいることにより、第三者の参加を促進させる結果となり、参加者が増えることで組織が継続していくことが明らかとなった。

(2) 自然発生的なスポーツ組織では、第三者に「認知」してもらうために多くの人が集まる場所選び・スポーツを行うに相応しい場所選び・安全な場所作り・組織を継続させていくための

「ビジョンの再確認」が重要であった。

・今後の自然発生的なスポーツ組織の可能性について

自然発生的なスポーツ組織の参加者が、その組織から離脱し新しい組織をつくるという事例があった。このようにして、自然発生的なスポーツ組織がより広がる可能性がある。

【まとめ】

参与観察やインタビュー調査を行うことにより、様々な視野で調査を行うことができ、現場での「生きた試料」を獲得することができた。

また本研究は、調査対象が二集団ということもあり、自然発生的なスポーツ組織をより様々な側面から考えるに当たり、研究の課題として様々な自然発生的なスポーツ組織を今後も検証していく必要がある。